工学教育のグローバル化を目指して

Toward the Globalized Education in Engineering

服 部 拓 也

Takuya HATTORI

今世紀に入ってからインターネットの爆発的な普及によって、フラットな世界が実現し、経済・社会のグローバル化とネットワーク化が一気に進展した。このような環境変化が進む中で、我が国では、長らく続いた経済発展が一段落した後の成熟社会への移行に手間取り、将来展望が開けない状況にある。このような状況から脱却するためには、経済・社会システムのグローバル化が不可避であるが、資源のない我が国が持続的発展を遂げていくためには、何よりもその発展の鍵を握る「技術のグローバル化」が求められる。そして、技術のグローバル化を進めるためには、その前提として「人材のグローバル化」と「教育のグローバル化」が同時に求められるということになる。

1. 技術のグローバル化

我が国の技術はコンポーネントベースでは優れているが、トータルシステムとしての最適化が進んでいないことから、技術の海外での普及という観点では諸外国に遅れをとり、国内市場でしか通用しない、いわゆる「技術のガラパゴス化」が起きている。日本の技術が世界市場での競争に勝ち残るためには、今一度、何が強みで何が弱いのかを冷静に分析・評価し、日本の技術を世界標準に高める努力、即ち、「技術のグローバル化」を図るべき時である。

2. 人材のグローバル化

近年、大学生や若手の研究者そして若手企業人の海外留学希望者が減っていると聞く。何も好んで厳しい競争社会に飛び込むよりも、日本国内というある程度将来が約束されている環境の中で、無難に勤め上げることを選択するという安定志向が強まっているのだ。また、海外に出かけて何かにチャレンジして帰ってくることが適正に評価されずに、むしろ国内を留守にすることがキャリアパス上ハンデにもなるらしい。しかし、このように海外から隔離された環境に閉じこもっているのは、世界の動きから取り残されて技術のガラパゴス化が更に進むなど、我が国は高齢化が進む中で益々沈滞していくことは明らかである。私自身仕事柄海外に出向くことが多いが、国際会議の場で中国や韓国の若者が、流暢な英語を駆使して堂々と立ち回って

いる姿に驚かされるとともに、日本のプレゼンスの低さに危機感を抱く。特に韓国の場合は、これまで日本に追いつけ追い越せと頑張ってきたが、今や日本は眼中にない様にも見える。今からでも遅くないので、志のある若者の海外留学の機会を高めて多様な価値観に触れる機会を与え、英語によるコミュニケーション力とプレゼンテーション力の向上を図り、海外人材とのネットワーク化を図るなど、産官学一体となって「人材のグローバル化」を強力に推進すべきである。

3. 教育のグローバル化

人材のグローバル化が遅れているのは大学教育だけの問題ではないが、教育のグローバル化が遅れているのは産業界のニーズが大学や学生に十分伝わっていないことも一因であろう。最近我が国の先進的な企業で、社内の公用語を全て英語にする取り組みが始まったことが、大学や学生に対して大いに刺激になることが期待される。大学に対してはテキストの英文化や英語による授業の導入に加え、海外との留学生の交換、教授陣の交流、履修単位の相互認定、更には共同研究の実施や実験施設の共用化など、大学間連携の強化による「教育のグローバル化」を一層推進されることを期待したい。また、少子高齢化が進む我が国においては、近い将来、企業においても海外からの留学生の積極的な採用という状況が必ずやって来ることを見通しておくべきであろう。その時に備え、インターンシップ制度を活用して、海外からの留学生の受け入れを積極的に推進するなど、我が国の企業も海外に開かれた企業となることを期待したい。

服部 拓也

1970年 東京大学大学院工学系研究科修士課程修了
東京電力株式会社入社
1996年 同社 原子力計画部長
2000年 同社 取締役福島第一原子力発電所長
2004年 同社 常務取締役技術開発本部長
2005年 同社 取締役副社長
2006年～ (社)日本原子力産業協会副会長(東京電力(株)顧問)
2007年～ (社)日本原子力産業協会理事長
2009年～ (財)原子力国際協力センター理事長
2010年～ (社)日本工学教育協会会長

平成 22 年 11 月 10 日 受付